出雲税務署長賞

「税の在り方」

出雲北陵高等学校　一年　三島　千央

「税」とは何か。その問い掛けに私はきっとこう答えるだろう。

「税」とは、私を取り巻く環境そのものである。と。ふと目の前に広がる街並みを見渡せば、スーパーマーケット、学校、交番、消防署、駅、当たり前のようにそこにある。その当たり前の風景を支えているものこそ「税」なのである。

私は日常的にある「税」と身近に接している。それは「消費税」だ。「消費税」とは、物品やサービスの「消費」に着目し課税する間接税である。例えば、ボールペンを買う、などといった時、代金を支払う。この時私たちが支払う代金の中に、「消費税」が含まれている。そうして、いつも身近に「税」と接しているのに、私が「税」を遠い存在、他人事のように思ってしまうのはどうしてだろうか。

支払われた「税」はどこに行って、何にどれくらい使われているのか。そういう「支払われた先」を知らないのだ。

税金は私たちの生活を支える存在であるため、もっと人々が「税金」に関心を持ち、積極的に社会参加につとめることが大切だと思う。そのためには、自ら知ろうという意思と知ってもらおうとする街づくり、その二つが併存することが必要と、私は考える。

私たちが普段の生活の中で「税」を感じる瞬間はどんな時だろうか。皆の「税」に対する関心を高めるには、日常生活の中で、地域を構成する「税」の存在をもっと身近に感じられる地域社会の実現が求められる。

例えば学校教育費。皆さんは知っているだろうか。児童、生徒一人あたり、小学生は九十二万八千円、中学生は百九万一千円もの年間教育費が税金によって負担されている。そうやって税によって自らが支えてもらっていることを学べる探究時間を設け、少し早い段階からでも「税」と接する機会を増やしてみたりしてみたらどうだろうか。

今回の作文を通して普段の生活の中で、自分が払った税金が地域や国のさまざまな事に役立っている、つまり自らが国や地域に貢献していると言う実感が得られる、そんな環境づくりが税への関心につながっていくのだと感じた。

「税金は、文明社会の対価である。」